

# 後志観光は今

小樽は観光が主要産業です。その魅力は、「明治以来の商業都市としての歴史と文化が魅力です。倉庫や社屋などの歴史的建造物が往時の面影を伝えています。小樽商大の前身の小樽高等商業学校も明治時代に設置され、古くから『大学の街』としての側面もあります。小樽商大は人材育成や若者の視点を提供する点で観光振興に「役買っていると思います」

—小樽観光の課題はどのようなところですか。

「関係機関が連携して『オール小樽で取り組む』というような機運が盛り上がりつつないよう感じます。そうした連携を深めることが大切なのではないでしょうか。小樽商大は学生を巻き込む形でさまざまな課題に取り組んでいます。大学だけが頑張っても限界があります」

—小樽商大の具体的な取り組みは。

「地元の大学として、地域貢献は常に考えている」と語る和田健夫学長

第6部 未来への提言③

小樽商大 学長

和田健夫さん (67)



## 魅力発信「オール小樽」で

「各セミナを中心、重要な課題と位置付けています。10年ほど前に大学内でのクラウドファンディングで歴史的建造物の保存を支援したり、英語の観光マップを作成したりしています。岩内町では港を復活した観光振興策やシンの加工などで雇用を創出する政策を提言しています。学問的な見地から地域おこしは、観光振興を自指し研究や実践を進めています」

—人材育成の面はどうですか。

「小樽商大は04年度、ビジネススクールを設置しました。その社会人教育のノウハウを生かし、旅館やホテルなど観光産業の経営にも協力していきたい。現在携わる社会人教育に取り組んでいるさまざまなプロジェクトも続けます。これ

他の大学と連携しています。商科大はビジネスが専門。その知見を貢献につなげています」

—今後の取り組みは。

「小樽は北前船の寄港地として日本遺産登録を目指しています。観光振興を自指し研究や実践を進めています」

—人材育成の面はどうですか。

「小樽商大は04年度、ビジネススクールを設置しました。その社会人教育のノウハウを生かし、旅館やホテルなど観光産業の経営にも協力していきたい。現在携わる社会人教育に取り組んでいるさまざまなプロジェクトも続けます。これ

光庁の事業を受託し、講座から観光振興には歴史的建造物や観光施設をつなげたりマーケティング、財務を専門的に学ぶ講座で実践的だと思っています。そうしたことを率先して進めていくのが地元の大学としてのミッションを受け、2年目からは全国

△記者のひと言▽取材を通して、小樽商大が多岐プロジェクトに取り組んでいることに驚かされた。ビジネススクールのノウハウは観光分野の人材育成だけでなく医療や農業にも生かされているという。「大学は人材育成を通して地域貢献するのが本分」という和田学長の言葉にうなずかされた。商部として栄えた小樽にビジネスや経済を専門にする商科大ができたのは必然なのだと感じた。(渡辺佐保子)



# 学童保育 先生は樽商生

小樽市内で英会話教室を開いているアカデミアが運営、下校後の小学生を預かる放課後児童クラブ「ちしきの森」は7月から、インターンシップ生として小樽商大の学生の受け入れを始めた。ちしきの森は児童に英会話の授業を行うのが特徴。現在、2～4年までの学生と留学生計10人が登録しており、英会話の講師や子供の面倒に奮闘しながら社会勉強をしている。(西出真一朗)

## 学生10人 英語教えて社会勉強

同大の「グローバル教育プログラム」の一環、年間60時間、事業所で研修すれば、単位として認められる。同大が掲げるグローバル(地球規模)な視野でローカル(地域)で活躍する「グローバル」な人材育成という考え方で、同社の理念が一致し、インターンシップが実現した。

同社によると、国立大と民間学童保育の連携は全国でも例がないという。インターンシップ生の受け入れは4日から始め、現在は日本人学生9人と留学生1人が登録。計34人の児童の面倒や英会話授業の準備、講師の仕事が与えられている。

11日に英会話を教えたフィンランドからの留学生のアンニ・ピハヤキさん(29)は「フィンランドでは子供向けの語学学校がない。将来、需要が増えるを予想しており、運営の仕方は勉強になる」と話す。

ちしきの森でのインターンシップに登録している3年の大倉重さん(20)は「理解力がまだ発達していない子供に分かりやすく英語を教える試行錯誤が経験になる」と登録理由を話す。若松通都社長は「子供は本物を真摯にシリアスにやる。仕事は簡単ではないことを実感してほしい」と話している。

### 小樽の児童クラブ受け入れ



ちしきの森の子供たちに英会話を教える小樽商大の留学生アンニ・ピハヤキさん(左)



### 1929年 小林多喜二が「蟹工船」発表

1929(昭和4)年、小樽ゆかりのプロレタリア作家の小林多喜二が、労働者の過酷な環境を描いた「蟹工船」を発表した。多喜二は幼少の頃小樽に移住し、小樽高商(現・小樽商大)在学中に文学を志した。旧北海道拓殖銀行を免職されて上京するが、33年に特高警察に逮捕され、拷問による非業の死を遂げた。小樽市の奥沢墓地では2月20日の命日に「多喜二祭」が営まれる。



小林多喜二 1931年、東京